

カルチャー・ショック 日本人のみた外国

水鉄砲とゲリラ

川中 豪(フィリピン)

それはまだアジ研に入る前、留学と称してマニラを徘徊していた頃。仲良くなったフィリピン人に、「帰省するから一緒に来ないか」と誘われた。冒険心を少々くすぐられ、二つ返事でOKしたのが旅の始まりだった。

彼の出身地はルソン島北部山岳地帯のある村。いわゆる少数民族の小さな村で、かつては首狩の風習もあったという。「周りには善い人たちがごろごろいるよ」(Nice People Around, there!)といたずらっぽく笑う彼とともに、マニラからバスとジープを乗り継ぎながら、片道まるまる二四時間かけて山深い集落を目指した。途中、座りっぱなしで痛くなったおしりを気にしながらも、この地域独特の「棚田」の美しい風景がなんとも珍しく、私の少々の冒険心は大きな満足を得た。

目的の村に近づいた頃、辺りはすでに夜の暗闇につつまれていた。突然「ヒュー」という口笛とともにジープは止まり、そして私たちは友人の言う「ごろごろい善い人たち」に囲まれた。

・Nice People Around: =ND A =New People's Army。そう、彼らはフィリピン共産党の軍事部門、新人民軍のゲリラたち。新人民軍を呼ぶ際の隠語として、Nice People Around: が用いられているのであ

る。そこは、新人民軍のチェックポイントであり、友人の村は彼らの勢力圏下にあった。

それから数日間の滞在中、ゲリラとの奇妙な共生関係が続いた。外国人である私に、彼らは興味と不信の入り交じった感情を抱いたと思うが、結束の強い村で客の地位を与えられた私に手を出せば、彼らは村にとどまれない。村出身者で新人民軍に参加した者はなく、ゲリラは他の地域から来たいわば「外様」なのだ。彼らは私を観てはいても、一定以上には近寄ってこない。結局、滞在中、私は村の人々とは大いに楽しい時を過ごしたが、ゲリラたちとは一言も言葉を交わすことはなかった。

ある日、村で昼ご飯をご馳走になったとき。私が食べ終わった後に、ゲリラたちがやって来た。彼らもそこで昼ご飯を食べた。その時改めて彼らをまじまじと見ることができた。中年のゲリラはわずかに二人ばかり。あと一〇人程は一五、二〇歳の少年、少女だった。昼食後、彼らは外で遊び始めた。プラスチック製のおもちゃの水鉄砲で無邪気に水をかけ合っただけで高らかに笑っていた。傍らには本物の銃が転がっていた。擦り切れたジーンズとTシャツとゴム草履を身につけなが

ら、彼らの体には自動小銃の弾倉がベルトで巻き付けられていた。しかし、彼の顔は子供そのものだった。

その後、留学を終え数年経ってから、マニラで友人にあった。彼の村には政府軍が入り、ゲリラたちはどこかに行ってしまったという。今、フィリピンの新聞を読みながら、政府軍と新人民軍の衝突の記事にぶつかると、あの青年と呼ぶにはまだ幼いゲリラたちの姿を思い出す。村人たちは表面的には友好を装いつつも、内心「お荷物」としてゲリラを見ていた。あの歳で、自ら何のために闘っているのか認識していたのかも疑問だった。長い山奥での戦闘に心身とも疲れてもいただろう。反政府運動の前には、そうした現実が存在している。

あの少年、少女たちは、今、その手に何を携えているのだろうか。

(かわなか たけし/動向分析部)

